

薬学部薬学科

森田莉沙

私は、2023年度水田三喜男記念奨学生としてハンガリー研修へ参加した。今回が私にとって二回目のハンガリーだったので、事前研修の時からとても親しみを持って行えた。今回の私たちのテーマは誰もが住みやすいまちづくりで、日本、ハンガリーの両方の国で何が行われているのか調査した。

ハンガリーでのバリアフリー化と日本でのバリアフリー化を比べる上でとても興味深かったのはそれぞれの国での建物に対する考え方の違いだ。ハンガリーでは古い遺跡がとても大切にされ、建物を建て替える時にも新しい部分とオリジナルの部分と見分けられる必要がある。それに対し、日本では建物を一から作り替え、伝統的な技術を使う。これらの違いがある中で新しいデザイン様式であるユニバーサルデザインを町全体が歴史的な作りになっているブダペストに導入するのはかなりの葛藤があるように感じた。一方日本は新しく作り替えることに抵抗がない、東京がごちゃごちゃして見えるのも新しいものが次々に導入されるからだと感じた。このように一つの社会問題でも国によって宗教、価値観、生活習慣等が異なってくるため、正解がいつも同じになるわけではないことが身をもって感じられた。

コミュニケーションに関しては、同じ英語を話していてもそれぞれの母国語に引っ張られて、表現やリアクションが異なることがとても面白かった。特に私たち日本人はリアクションがハンガリー人に比べ大きくないので、ハンガリーの学生と交流する中で、相づち等が移って、日本人同士で会話している間もそのリアクションや相づちを使い、ハンガリー文化に染まった。また、私たち日本人は当然日本語で会話するのが心地よく、ハンガリー人もハンガリー語が一番心地よい言語のため、会話の中でハンガリー語で会話が始まってしまうと疎外感を感じるがあった。逆に私自身が日本語がわからない人とコミュニケーションをとるときになるべくお互いの共通言語で話すという気遣いが重要なことがわかった。そんな中で、ある一人のハンガリーの学生が、日本人同士で何の話をしている内容はわからないけど、日本語のリズムがとても聞き心地がよく、日本をただ聞いているのが好きだと言ってくれた。私たちが普段使っている言葉がどのような印象があるのか知ることができ、とても興味深かったのと同時に、自分の母国語が好きになれた。

ブダペストの町を歩いているだけで、私にとって刺激的なことがたくさん起こった。例えば、駅で待っているおじさんが陽気に踊っていたり、鳥が白っぽかったり、またエスカレーターのスピードにも驚かされた。私にとって衝撃的なことでも、ハンガリー人にはこれがブダペストだよと、とても平然としていた。今回私たちは基本的に首都のブダペストにいたが、ハンガリーの学生たちの地元のようにも聞くことが出来た。まず、日本では農家や牧場でしかないような畑や家畜を持っているということを知った。ニワトリはもちろん、馬や羊までも飼ってい

るというのは驚いた。そのため、ハンガリーといっても、私が経験したのはハンガリーの一側面であり、地域によって特色があることを知り、ハンガリーの奥深さが増した。

ハンガリー料理に関してはおいしいがとにかく脂っこい。日本食がいかにかヘルシーかが感じられた。ハンガリーでぼき井や、タピオカを食べてみたがやはり日本のほうがおいしかった。しかし、パンや、チーズ等は絶品だった。ハンガリー料理ではサワークリームやカッテージチーズが多く使われていたため、日本に帰国した今、これらの味がとても恋しく感じる。ハンガリーではカッテージチーズはチーズには含まれないらしい。これはどのハンガリー人に聞いても絶対にチーズとしては認めなかったためとても面白いなと感じた。特に私のおすすめはケバブである。ブダペストはどんな国の料理も大抵あるが歴史的背景からなのか、ケバブはとてもおいしかったのと、町のあらゆるところにお店があった。

今回のハンガリー研修を通して、日本にとどまっていたは感じることの出来ない貴重な体験や、知識、ハンガリーの学生との絆が得られた。これらはこの研修だけで終わるのではなく私の生涯を通して生きていくものになるだろう。そして、自分の中で消化して終わるのではなく、今、またこれから自分と関わってくれる人たちいい影響いい影響を与えられるだろう。

最後に、水田三喜男記念奨学生として本研修に参加させていたこと、本研修に関わっていただいたすべての方々に感謝申し上げます。

